

科学研究費補助金（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	18102001	研究期間	平成18年度～平成22年度
研究課題名	アラビアンナイトの形成過程とオリエンタリズム的文学空間創出メカニズムの解明	研究代表者 (所属・職)	西尾 哲夫 (国立民族学博物館・民族文化研究部・教授)

【平成21年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる	
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

1704年のガランによる仏訳の『アラビアンナイト』の刊行は西欧文化史における画期的な出来事で、それに触発されて多くの物語やメルヘンが誕生した。そのため、西欧には『アラビアンナイト』に関する膨大な数の研究文献がすでにあるが、日本では大場・前嶋・池田らの大先達の研究以降、目立った研究がなかった。その点、西尾グループによる本研究は、全写本のデータベース化など、わが国における『アラビアンナイト研究』の一時代を画す重要な研究と認められる。

西尾哲夫著『アラビアンナイト』（岩波新書）と同氏による一論文、杉田英明著の2論文や青柳悦子の近著『デリダで読む「千夜一夜」』など優れた研究成果を発表しており、研究は着実に進展していて、すでにかんりの成果を上げている。

本研究のうち現時点で最も高く評価できるのは、『アラビアンナイト』の受容史（特に日本における受容史）研究であろう。ここにはいくつかの新発見がある。また本研究の最大の眼目であるガラン訳以前のアラビアンナイト形成過程の研究に関しても、「原典テキスト形成過程に関する従来の定説を書き換える可能性が非常に高い」ようで、本研究の完成時における成果が大いに期待される。言うまでもなく、全写本をデータベース化しただけでは文献学的な研究をしたとは言い難い。研究終了時には、前嶋研究を超えるような精緻な文献学的研究の実施を期待したい。

長年の蓄積のある西欧の『アラビアンナイト』研究に匹敵する研究を残すことは至難のことである。しかし、西尾氏はすでに、『日本的視点から見たアラビアンナイト』という英文著作によって国際的な賞を受けており、中東と東アジアとの文明間交流の歴史的構築という西欧にはない視点を当初の目的通りに深めることができれば、世界史を大きく書き改めるような、さらに国際的な『アラビアンナイト』研究の実現も不可能ではない。

研究代表者や数名の研究分担者の方法論はかなり異なるが、それが良い相乗効果を上げている。

【平成23年度 検証結果】

検証結果	当初の研究目標を超える成果が達成されたと考えられる。
A+	とりわけ『アラビアンナイト』関係の写本のデータベース化は将来の研究にとって極めて重要な土台となるものであり、高く評価できる。これは、文献学的な研究も含めて、あらゆる方向からの『アラビアンナイト』研究の原点となるはずである。 更に『アラビアンナイト』の研究自体についても、従来にはない新しい方向に踏み出しており、これから先の次なる成果に大きな期待がもてる。